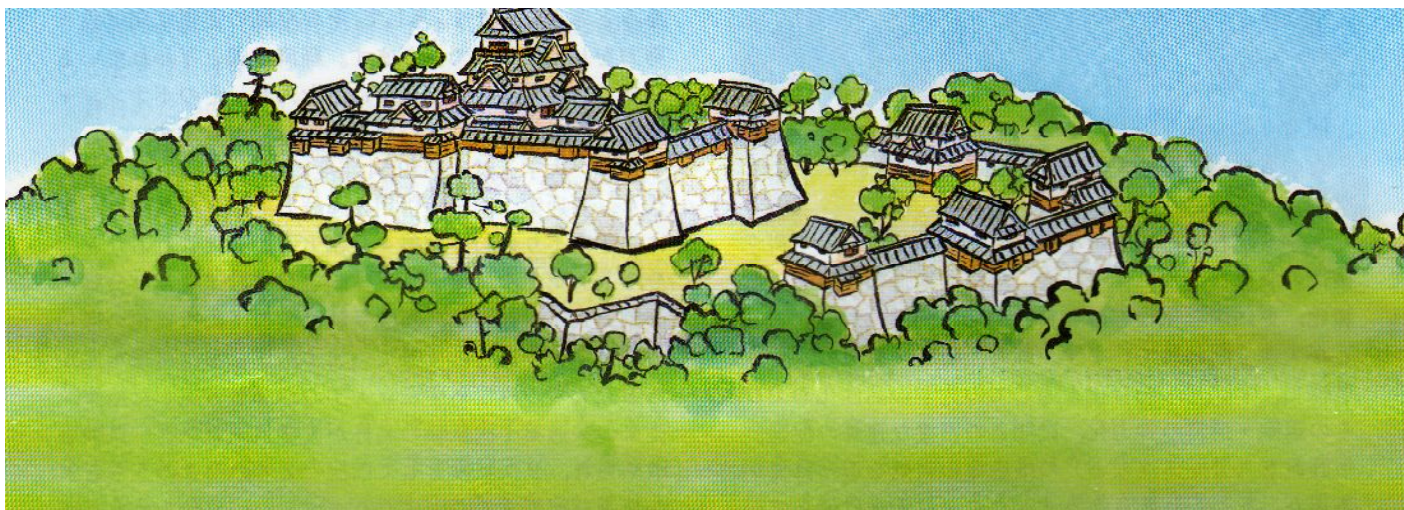




通巻15号
第3号



《目次》

同窓会の皆様へ	理学部長……2
教室便り……	3
会員便り・学生募集要項からの抜粋……	6
愛媛大学同窓会連合会結婚相談所……	7
東京支部・朋友会館・会計報告・あとがき……	8

同窓会の皆様へ

理 学 部 長
仙 波 敬

同窓会の皆様、いかがお過ごしでございますか。それぞれの職域におかれて御健闘のことと推察し、衷心より御慶び申し上げます。

大学も臨教審の答申を契機として、近年における科学技術の急速な進歩に伴う社会、経済の構造の複雑化、情報化、更に国際化などの今日的要請に的確に対応することが大きく問われています。即ち、研究・教育の深化、多様化、学際化、総合化を通じての大学の活性化およびその組織・運営の弾力化、民間との密接な関係の促進、生涯教育（公開講座など）の推進等の対処を迫られている現在、先づわれわれの為すべきことは未来に備えての前述の種々の要請に応えることのできるよう開かれた大学としての意識の改革・高揚を図ると共に、国際社会の構成員として果たすべき責任への自覚にあらうかと私は思っています。

これらに対応する方向で、愛媛大学も大学レベルにおいて色々の事が考えられており、特に当理学部では、全教官の過去5年間（1983～1987）における研究活動に関するすべての業績・資料を集録し“研究活動の歩み”として1988年2月に創刊・公表しました。これは大学の自己評価の理念に沿ったものであります。私が言うのも変ですが、その内容は充実したものであり他大学からも高く評価されています。今後とも尚一層の研究活動を続け大きな成果を上げて行くつもりであります。

これからの社会は工業化社会から脱工業化社会、即ち、情報化社会への移行であるというような事をよく耳にしますが、今日の日本の経済的繁栄をもたらしたのは科学技術の進歩にあったことを忘れてはならないと思います。天然資源の大部分を海外に頼らなければならない我が国はむしろ科学技術面における模倣の後進性を脱し基礎科学と応用科学との有機的な調和による自主的創造的技術の開発に努めることこそが、我が国の繁栄を維持するために必要なことではないでしょうか。

従いまして教育面についても、自然現象の解明と同時に色々の分野に応用される基礎科学を専攻する理学部の学生には、創造性豊かに物ごとを考える力を身につけさせる教育を意識的にすることが、これからは特に大切であろうと考えています。

当理学部の将来計画として考えていることはたくさんありますが、当面もっとも必要なことは基礎科学の果たして来た過去の歴史に鑑み、また、これからは大学院時代となるであろうことを先考するとき、基礎科学の整備・充実としてどうしても大学院（博士課程）の設置にあると考えています。そして、その早期の実現に向け色々努力をしている所であります。経済大国と言われている今日こそ、基礎科学の充実に力を入れ、そのポテンシャルを上げるべきではないかと痛感しております。

さて、大学入試も昭和54年度に従来のⅠ期・Ⅱ期制に代り、共通第1次試験併用の連続方式の2次試験に、更に来年度より新しく分離・分割方式が導入されるなど、今や共通第1次試験と2次試験としての連続及び分離・分割方式が併存され、複数受験の名の下に複雑化の様相すら示すようになって来ています。またまた再来年度から国立大学のみならず私立大学の参加を考慮した結果、従来の共通第1次試験の名称が大学入試センター試験と改められ、2次試験として前記の2つの方式のうちどれかを選び実施することになります。いづれにしても、われわれ現場で教育を司る人間としては、この枠内で如何にすればよい学生が集められ、それら学生を如何に教育して社会に送り出すかが大きな問題であります。

当理学部としては、御承知のように、数学、物理、化学、生物及び地球科学の5分野があり、学科により強調するニュアンスは多少の違いはありますが、自然に対し新鮮な疑問を持ち、自主的に問題点を解明しようとする情熱・意欲のある学生を強く希望しています。どうか、高校の教職におられる方々には、是非とも斯かる高校生を当理学部に受験させて頂きたいものと敢えてお願いする次第であります。

最後に、卒業生の方々の益々の御健勝、御多幸と御活躍をお祈りしますと同時に、今後とも母校にも御関心を持って頂きその発展・育成により一層の御協力を賜りたいことを希望し、まともの無い話になりましたが、御挨拶とします。
（昭和64年1月記）



愛媛大学大学院理学研究科第9回修了記念

教室だより

数学教室

昭和が終わり、新時代の到来ですが、皆様には御健勝のことと存じます。

月日のたつのは早いもので、前回の同窓会報が発行されてから3年6ヶ月が経過しました。その間、数学科の学生定員は臨時増募分4名を加えて39名となりました。就職状況は好調です。

教官の移動は依然活発で、61年5月に位相数学助手の津田先生が教養部に助教授として転出、後任には大阪大学より山田先生が着任されました。また、解析学助手として60年秋東京大学より着任された戸瀬先生は62年4月に母校へお帰りになり、その後任として、京都大学から須藤先生を迎えました。応用数学講座では、助教授の池田先生が昨年4月竜谷大学理工学部教授として移られ、北川(高)先生が講師に昇格、さらに10月、応島大学より滝川先生が助手として着任されました。

尚、国際交流も活発で、昨年は5名の外国人研究者(アメリカ2、中国2、シンガポール1)が数学教室を訪問されましたし、目下中国からの留学生2名が大学院生および研究生として在学中です。また、位相数学助教授の野倉先生は現在文部省長期在外研究員として今年6月末までアメリカに出張中です。このような交流は一層盛んになることでしょう。

一方、事務官の移動も激しく、当教室に永らくお勤めになった茂川さんは62年4月に教養部へ転出され、その後任の千葉さんと日野さんは昨年相次いで退職されて、現在は、菊池さんと福岡さんのお二人がお勤めです。

現在、私達の社会は、いわゆる高度情報化社会へと急速に変貌を遂げつつありますが、数学の世界も例外ではなく、電子計算機を研究に利用される先生も多くなりました。かつて、電子計算機が応用数学関係者の専有物であったことを思うと、感慨を禁じえません。

松山においでの際は、お気軽に教室にもお立ち寄り下さい。ミニコンやパソコンの並ぶ計算機室をのぞいて、昔と比較されるのもまた一興でしょう。(山本 記)

物理学教室

情報化、国際化、技術革新の時代といわれる今日この頃、同窓生の皆様には、各分野の第一線で御活躍のことと存じます。

前回の教室だより(昭和60年)以後の、教室のようすを、お知らせします。先生方の顔ぶれは以前と同じです。仙波先生は、学部の信望をになって、その後も理學部長に推挙され、いま4期目(平成2年4月まで)を勤めて



愛媛大学理学部第17回卒業記念 S63. 3. 24

おられます。一方、学生定員は、本省の増員計画に従って、従来35名のところ、昭和61年度入学生から37名になりました。

教室は一見以前と同じですが、中味の方はずいぶん変質しました。まず、先生方の外遊が目立ちます。1年間の留学の方、短期間の国際会議出席の方など、いろいろですが、この4年間で延べ10名ばかり出かけられました。次に設備の面では、液体ヘリウムが自前で使えるようになりました。また、教室中マイコンだらけ、という感じになりました。

前回に、企業からの求人が多く、しかも年ごとに増加していることを書きましたが、この傾向は、その後も続いております。前回と変わったのは、大学院修士課程修了者への求人が、急激に増加したことです。そこで、大学院進学希望者も増えまして、学部卒の3分の1が進学するようになりました。当教室の修士定員は1学年8名ですが、定員オーバーで、更に他大学の修士へ進む者も毎年数名あります。物理学という、具象から抽象に、かつ物質観から世界観にもわたる范濠とした学問にドブブリ漬った若い脳細胞の柔軟性と自在な発想とが、企業の未来技術を支えて行くのだと思います。修士で素粒子理論を専攻した者が、堂々とメーカーへ採用になります。物理の個々の知識の断片とは無関係に、全人格的な能力から来る物理的センスが重視されるのです。

同窓生で古い方には、もうお孫さんがおありです。同窓生の年齢に上限はありませんが、現職教官には定年があります。次号の教室だよりでは新しい先生がぐっと増えていることでしょう。物理学の生命は若さと新鮮さです。先生方の顔ぶれも変わり、また全世界50億人の中での我が物理学教室の客観的地位も変わりながら、リアルタイムという有無を言わせぬ独立変数に従って、1個連続関数的に続いて行くもの、それが伝統であり、それを支えていくよりどころが同窓会の存在価値だと思います。

末筆になりましたが、皆様の益々の御健康と御発展を祈ります。(松澤 記)

化学教室

卒業生の皆様方には、その後お変わりなく、お元気に御活躍のこととお慶び申し上げます。お蔭様で私達教職員一同も元気に、「旧制大学に追いつき、追い越せ」の精神で、研究と教育に日夜微力を尽くしております。

さて、文理学部の時代に化学教室の大黒柱として、また、文理学部長として活躍された橋本吉郎先生が、昭和60年8月29日に89歳で逝去されました。ここに改めて、御冥福をお祈り申し上げます。なお、一昨年には須賀先生が停年で退官され、その折には多くの方々から御厚志を賜りまして、誠に有難うございました。また、事務室では森田さんの退職後に大本幸子さんを迎えまして、天野さん共々、事務全般でお世話になっております。

御存知のように、一昨年から入試が複数受験の制度に変わりまして、化学科の志願者が200名を突破する事態を迎えました。その余波で二次は化学のペーパーテストだけになり、昭和54年以来の面接実験は残念ながら(?)昨春から廃止となりました。ただし、県外からの入学者が大幅に増えまして、バラエティに富んだ構成になりました。修士課程の方は、一時的に定員を少し割っておりましたが、今春には再び超満員の盛況が予想され、彼等の大活躍が今から期待されております。なお、就職の方も非常に順調で、全員が希望通りの職域に進出しています。また、院生の一部は他大学の博士課程に進学して、更に研鑽を積んでおります。

理学部の発足以来早くも20年の歳月が流れまして、教官一同もトシを取りましたが、しかし、若い学生諸君に負けることなく、教室の年中行事にも元気に参加しております。春期の新入生歓迎会や研修旅行、秋期の各種学会講演やスポーツ大会、年度末の卒論発表会や追出コンパなど、教官と在学生諸君との緊密な相互交流を促進すると共に、切磋琢磨の精神を涵養する伝統的な諸行事は、これからも一層の充実を図りたいと思っております。

旧臘には、上海有機化学研究所からOBの裘毅君を迎えまして、在学生共々、講演会のひとときを楽しみました。皆様方におかれましては、御出張の機会や余暇の合間を割いて適宜御来学の上、後輩達の為にも、暖かい御支援や酷しい御鞭撻を賜りたいと存じます。また、「化学が面白くて実験が大好き」な青年達を、皆様方の近辺から我々の化学教室に送り込んで戴ければ、大変嬉しく存じます。

末筆ながら、皆様方の御健勝と益々の御発展とを、心からお祈り申し上げます。(河野 記)



生物学教室

何時の時代にあっても、古き良き時代とは青春時代ではないでしょうか。4年もしくはそれ以上の年月を過ごした学生時代は何時振り返っても懐かしいものです。ときたま届く同窓会報にその時代を思い返してください。卒業生の皆さんお元気ですか。それぞれにご活躍のことと存じます。

松山も随分変わりました。大街道は関西有数のアーケード街になり、あちこちに大きなビルがにょきにょきと建ち、道後地区には目を見張るばかりの県民文化会館が完成しました。丹下健三氏の設計になるというこの建物は、東京のど真ん中に持っていても違和感がないでしょう。一昨年以来愛大卒業式も入学式もここで行われます。記念講堂や体育館での卒業式に比べてその華やかなこと。我が国の繁栄がここにも反映されています。願わくばこの繁栄が早く研究室にも及んでくれることを!研究費はやはり充分とはいいい難く、少ない費用でいかに優れた成果を上げるかに苦勞しています。技術一辺倒ではなく、基礎科学にもっともっと力を入れて欲しいものです。しかし、着実に進歩はしておりますのでどうぞご安心を。

前回昭和60年の同窓会報以後の教室近況をお知らせします。昭和61年、生物教室の主ともいべき準備室の古川さんが定年で退官、同63年、今度は教養の沢田先生退官。皆様おなじみの買物籠、草履姿が愛大のキャンパスから消えました。もっとも、すぐ隣の松山商大へ行けば懐かしい姿にお目に掛かることが出来るでしょう。さらに痛恨の極みは、同窓でもある教養部の池田先生が62年春、肺癌でお亡くなりになったことです。これからという時期、実り多かるべき研究課題、大切なご家族を残してのご他界は先生は勿論、我々にとっても大きな心残りです。謹んで池田先生のご冥福を祈ります。

次に新しい先生方。まず理学部では63年に井上先生がカルフォルニア大学から生理学講座に。専門は植物の成長生理ですが酵母の仕事にも協力を願っております。教養生物では昭和60年10月、加納先生(電気生理—実験材料のコオロギが四季を通じてコロコロと鳴いております)が北海道大学理学部から、62年春、山口先生(培養細胞を使つての発癌機構)が放射線医学研究所から、63年には垣内先生(魚の浸透圧調節)が北大応用電気研から、さらに和多田先生(遺伝子工学—遺伝子組み替えで可愛いショウジョウバエを!)がアメリカのNIHからとあいついで着任されました。ここ数年の間に多くの方々がお見えになり生物学科のレパートリーがぐんと広がりました。現職(?)の先生方はおしなべて髪の色などに若干の変化が見られはしますが、元気で活躍中です。また大植、宮本の大先達は、お歳のせいによるい

くばくかのご障害はあるかもしれませんが、お達者にお過ごしの様子。伊藤先生は今なお現役の研究者としてご活躍、昨年の秋には愛媛県教育功労賞を受賞されました。このように生物学教室は外国帰りの若い独身の先生方やアフリカ、インドネシア、中国などからの研究生も受け入れ国際色豊かにアクティビティ増加の傾向にあります。今後にご期待下さい。どうか卒業生の皆様も、遠きに在りて想うだけではなく、ときには教室を訪れてご活躍の様子をお聞かせ下さい。それが我々には勿論、在校生にとっても何よりのアクティベーターになります。

時に、今日は1月7日。テレビは天皇の崩御を、そして昭和の御代の終わりを告げています。時代の変わり目、時の流れをつくづく感じます。この3月には石川先生が定年退官です。私にもそろそろバトンタッチの時が迫って来ました。

昭和への惜別と新しい平成の門出にあたり卒業生の皆さんの健康と益々の発展を念じます。(村山 記)

地球科学教室

卒業生の皆さんお元気ですか。昭和から平成に元号が変わり感慨無量です。何か新しい良いことがありそうな気がするのですが、皆さんはいかがでしょうか。

前回の同窓会報が出たのが昭和60年でしたが、それ以後、教室の先生方の動静もかなり変化がありました。昭和61年10月にアンモナイトの棚部先生が、前年度の鳥海先生を追いかけるように東京大学古生物講座へ移られました。このお二人の転出により先生方の磯釣り熱は急に下がってしまったようです。

昭和62年に入ると1月早々に新潟大学から小松先生が赴任されました。御専門は北海道の日高変成帯などの構造岩石学で、御趣味はお酒、日本酒でウイスキーでない点に注目しております。4月には加藤先生が停年で御退官になりました。現在は東京にお住まいで元気で2冊目の物理探鉱学の本を御執筆中とか伺っております。7月には小河先生が資源探査学講座の助手として東京大学から新しく赴任されました。物理数学に明るい明朗でピチピチのコンピューター人であります。

昭和63年には4月、小屋口先生が熊本大学へ専任講師として転出、と同時に英国のケンブリッジ大学へ新婚の奥様と一緒に海外出張されました。私にとっては夜のカラオケの助っ人がいなくなり残念です。5月には松川先生が助教授になられ、相変わらず忙しげに動きまわっております。8月に入ると北海道大学から地殻化学講座の助手として変成岩岩石学をやっている榊原先生が着任されました。新居浜西高の出身で、囲碁四段が光っております。10月に入ると大谷先生が東北大学へ助教授として転出されました。大谷御殿で知られる超高圧装置が淋しげにしていました。

平成元年の3月には地質学と古生物と釣を担当しておられる松尾先生が御退官になられます。とくに留年を経験された卒業生諸君の中には随分と先生のお世話になった方がおられると思います。また一段と淋しくなります。

次に卒業生の動向について少し書いて見ましょう。1期生の神崎正美君が東京大学の地球物理学の大学院を修了し、理学博士を修得されました。教室の卒業生の第1号です。続いて九州大学に行った大塚康雄君と大阪大学の神月靖君の健斗を祈っております。国家公務員1級(上級)の合格者が出ました。3期生の佐藤尚君です。卒業後の勉強に対して拍手を送りたいと思います。海外における活躍としては青年海外協力隊員として澤村信英君がマラウイへ、村上敏雄君はモロッコへ行って来ました。鷲見武富君も行ったとの話ですが、塩田昭夫君は自費で1年以上世界漫遊して昨年帰国しました。現在、神崎君がニューヨークの州立大学で、山本浩君がヒューストンで、増井芽君がバンコクでそれぞれ頑張っています。教室の先生方もヨーロッパへ、アメリカへ、中国へいずれも短期間ですが学会その他で行かれました。私も、昨年行った中国が忘れられず、中国語の文献を辞書を片手に読んでいる次第です。退官された都築先生もお元気で、昨年は奥様と二人で中国旅行を楽しまれたそうです。

昭和から平成へと新しい時代に入りましたが、教室も新しい時代を迎えようとしています。この4月には地質学と資源探査学講座に3人の新しい先生をお迎えする予定です。新しい時代に入って皆様方の益々の御活躍を祈って止みません。(桃井 記)

臨海実験所

しばらく中島の臨海実験所に来ていない方はあまりの様変わりに驚かれるでしょう。

- 1) 高速艇で高浜⇒中島(大浦)23分。
- 2) 道路拡張で11t車が臨海まで行ける。
- 3) 63年3月、新鋭調査船「とびうお」(写真)が進水。宇和海調査などに大活躍。
- 4) 63年9月、三好初美氏退職。後任に木田悦子氏。臨海の平均年齢大いに下がる。
- 5) 現在臨海本館の塗装工事中。平成元年3月「白亜の殿堂」甦る。

お近くに御出での折は是非お訪ね下さい。



会 員 通 信

私が愛媛大学の門を叩いたのは、昭和33年の4月、28歳の時であった。約10年前の昭和24年、学制改革に際して、経済的な理由で新制大学へ転ずることもなく旧工専を卒業、以来7年間、中学校で教鞭を取る間も「何時の日か機到らば再び……」との思いが胸中に燃え続けていた。

その7年の間に次弟は大学を卒業、末弟も大学へ入学し、その学資のメドもほぼついたため、遂に永年の夢—技術者が研究者への道—を実現させるべく人生の転換を図ったのである。その第一歩として全国の国公立大学へ三年編入の可否を問い合わせたが、殆どすべての大学はその門を鎖ざし、僅かに二大学のみがその門を開いていたに過ぎなかった。

その一つ、愛媛大学を受験、辛うじて編入は認められたものの、囊中僅か退職金のみ、仕送り皆無という将に背水の陣であった。それだけにこの2年間は非常に貴重であり、新しい知識の吸収には極めて貪欲であったように思う。その頃、痛切に感じたことは、学生とは如何に勉学の機会と時間に恵まれているかということであった。

さて、いよいよ卒業期を迎えたが、大学院への道は囊

中すでなく、又、大企業の門も30歳の超 late learner には固く閉ざされていた。幸いH教授の紹介で大阪の中企業の商社に拾われ、糊口を凌ぐことは出来たものの今一つ商社の水になじめず、結局2年余で退社することとなった。当時は技術者底の時代で他企業からの誘いもあったが臨月に近い妻から「次々に会社を替ることになれば、そのうちに橋の下に住むことになる」との懇願で心ならずも「昔とった杵柄」で再び教職の道に戻ることとなった。それ故、今でもあの時企業に移っていれば何か研究が出来たのではとの忸怩たる思い、痛恨の念が沸いてくる。

爾来26年、その中で工業高校の生徒指導部長時代の8年間、及び困難校といわれた高校の教頭時代の3年間は、将に心身を切り刻むような年月であった。度々救急車の世話にもなり、医者はボックリ病の手当を教えてくれたが、妻は常に葬式代の心配をしていたようである。

もうあと僅か一年余りで現役を去るが、特に若い後輩諸氏に次の言葉を贈りたい。

「常に自己の最善を盡されよ」と。

最後に大学の益々の発展をお祈り致します。

文理学部理学科化学専攻(8期生)

松崎 貞憲

(大阪府立富田林高等学校校長)

平成元年度愛媛大学学生募集要項からの抜粋

理学部の概要

1) 沿革及び特色 昭和24年5月、旧制松山高等学校(大正8年4月創立)を母体として、愛媛大学文理学部が発足し、昭和43年4月同学部の改組拡充により理学部が独立した。

その後、昭和46年4月に附属臨海実験所が併設された。更に、昭和52年4月には地球科学科が新設され、既存の数学科・物理学科・化学科・生物学科と併せて、現在5学科20講座を擁するに至っている。これらの整備・充実とあいまって、昭和53年4月に大学院理学研究科(修士課程)が設置された。

本学部では、各専門分野のスタッフにより、意欲的な研究が日夜、活発に行われている。学生は、このような学究的雰囲気の中で専門教育を受け、最終学年では各講座の研究室に所属して卒業研究を行うことにより、研究の一端に触れるとともに教官との接触を更に深めている。

卒業後の進路は、コンピューター、電気・電子、化学、製薬、資源開発、商社等の企業及び教員、官公庁等各方面にわたっており、豊富な求人数と例年安定した就職率で、卒業生はいずれも社会から高い信頼と評価を勝ち得て、全国各地で活躍している。

大学院進学については、本学の理学研究科のみならず、他大学の博士課程のある大学院に進学する者も少なくない。

2) 学科、講座 理学部には次の学科、講座がある。

数学科(代数学・幾何学、解析学、位相数学、応用数学)、物理学科(量子物理学、物性物理学、電磁物理

学、応用物理学)、化学科(分析化学・無機化学、物理化学、有機化学、構造化学)、生物学科(形態学、生態学、生理学、発生学)、地球科学科(地質学、鉱物学、地殻化学、資源探査学)

学内施設・設備

機器分析センター

測定技術の進歩による精密な基礎データは今日の自然科学分野の発展に多大の貢献をしている。

機器分析センターは高度な性能を備えた最新の大型測定機器を整備して、教官や学生の研究活動の便宜をはかるための共同利用施設として理学部キャンパスに設置された。

同センターには物質の微視的な性質や分子、原子の状態を詳しく調べるのに必要な大型機器が数多く設置されており、四国地域における大学の教育、研究活動の推進に大きく寄与するものと期待されている。

主な機器:

液体ヘリウム製造装置
電子スピン共鳴(ESR)装置

高圧分折電子顕微鏡
二重収束LC質量分析装置

核磁気共鳴装置 60 MCHN 元素分析装置
自記旋光分散計



理学部屋上から城山を望む
(手前が機器分析センター)

愛媛大学同窓会連合会 結 婚 相 談 所

かねてから準備が進んでいました上記相談所が昨年12月15日に発足しました。規約や実施要領は下記の通りで、申込書などは依頼されて同封しました。申込書など追加の必要な方は結婚相談所事務局の方までご連絡下さい。なお、相談所は4月から松山市大街道3丁目に移転の予定ですが、郵送は元の住所で可能です。

愛媛大学同窓会連合会結婚相談所規約

第1条（目 的）

愛媛大学同窓会連合会結婚相談所（以下相談所という）は、愛媛大学同窓会員の要望に応え結婚の相談に応ずることを目的とする。

第2条（運営委員会）

相談所に運営委員会を置く。

運営委員会は各学部同窓会から各1名及び朋友会館委員会から3名計10名の委員を以って構成する。

運営委員会は前条の目的を達成するため、重要事項について協議決定する。

第3条（相談所長）

前条の委員の中から相談所長1名を互選する。

相談所長は相談所の運営を総括する。

第4条（相談所長、運営委員の任期）

相談所長、運営委員の任期は2年とする。

但し、再任を妨げない。

なお、補欠による場合の任期は前任者の残存期間とする。

第5条（相談員）

相談所に相談員若干名を置く。

相談員は運営委員会において選考し、相談所長が委嘱する。

相談員は結婚の相談にあたる。

運営委員は相談員を兼ねることができる。

第6条（協賛員）

相談所に若干名の協賛員を置くことができる。

協賛員は運営委員会において選考し、相談所長が委嘱する。

協賛員は相談所の趣旨に賛同し、資金援助にあたる。

第7条（相談員、協賛員の任期）

相談員、協賛員の任期は定めない。

第8条（資 金）

相談所の運営に必要な資金は結婚申込金、寄付金をもって充てる。

第9条（監 事）

相談所に監事2名を置く。

監事は運営委員会において選考し、相談所長が委嘱する。

監事は相談所の経理について監査し、その結果を運営委員会に報告する。

第10条（監事の任期）

監事の任期は2年とする。

補欠による場合の任期は、前任者の残存期間とする。

第11条（事務局）

相談所に事務局を置く。

事務局は松山市道後樋又10番13号愛媛大学朋友会館内に置き、相談所の庶務会計等の事務を司る。

第12条（事務局長）

事務局に事務局長を置く。

事務局長は事務局の事務を統括する。

事務局長は運営委員会において選考し、相談所長が委嘱する。

第13条（事務局長の任期）

事務局長の任期は定めない。

附 則

この規約は1988年12月15日から施行する。

愛媛大学同窓会連合会結婚相談所実施要領

第1条（結婚相談申込の手続き）

結婚の相談を希望する者は、相談所所定の申込書1通及び本人の写真5枚並びに家族集合写真があれば1枚を添え、松山市道後樋又10番13号愛媛大学朋友会館内結婚相談所事務局宛に送付すると共に申込金として金1万円を相談所所定の振込用紙により振込むものとする。

また、見合をする時はその費用として、双方から各金5千円を前項の方法により振込まなければならない。

第2条（申込者の資格）

結婚相談申込者の資格は下記各号の該当者とする。

- (1) 同窓会員とその家族
- (2) 愛媛大学教職員とその家族
- (3) 相談所役員とその家族
- (4) 前号の役員から紹介された者

第3条（相談員の業務）

相談員は前条の者から申込があった時は、相談の日時、場所等につき連絡をとり相談に応ずる。見合、交際等の具体的方法については相談員が適宜に定める。

相談員はその経過を相談所長に報告する。

第4条（協賛員の業務）

協賛員は寄付を希望する者があった時は、相談所長宛報告する。

相談所長は運営委員会に諮り、寄付者からの寄付金受入れを可とする時は、協賛員を介して相談所所定の振込用紙により振込ませる。

第5条（守秘義務）

相談所関係者は結婚相談により知り得た事項について秘密を厳守する。

第6条（事務局の業務）

事務局は申込者名簿の作成、資料の整理、その他相談所長の指示に従い庶務会計の事務を司る。

第7条（役員の招集）

相談所長は随時役員を招集し協議する。

附 則

この実施要領は1988年12月15日から実施する。

愛媛大学理学同窓会東京支部会会則

第1条 本支部会は、愛媛大学理学同窓会東京支部会とする。(以下本支部会という)

第2条 本支部は、東京都、関東各県、山梨県及び福島県在住の愛媛大学理学同窓会会員(正会員及び特別会員)を以て組織する。

第3条 本支部会は、会員相互の連絡を密にし、親睦を図り、母校の発展を援助し、かつ、協力することを目的とする。

第4条 本支部会は、第3条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 愛媛大学理学部の事業に対する協力支援
- (2) 支部会総会の開催
- (3) その他適切な事業

第5条 本支部会に次の役員を置く。

支部長	1名	副支部長	1名
会計監査	2名	総務幹事	若干名
学科代表幹事	若干名	会計幹事	1名
顧問	若干名		

第6条 役員は会員の総意により選出する。

第7条 役員の任期は1年とする。但し再選を妨げない。

第8条 役員会は役員をもって構成し、つぎの事項を行う。

- (1) 運営上の決議並びに報告
- (2) 顧問の委嘱
- (3) その他運営上必要とする事項

第9条 本支部会の総会は年1回とし支部長が招集する。

第10条 役員会は、適時支部長が招集する。

第11条 本支部会会則の改正は、総会において出席者の過半数の同意を必要とする。

愛媛大学朋友会館

皆様のご協力により建設され、大学が主体となって運営されている会館の利用法をお知らせします。

1. 場所など 松山市道後樋又(ひまた)愛媛大学事務局(護国神社すぐ南)東に隣接。Tel 0899-23-4049
会館名を同窓会では朋友会館、事務局では職員会館と言いますが、同じ建物です。タクシーで来られる場合樋又の愛大本部すぐ東の職員会館と言った方が分かりやすいと思います。大学会館は別の所にあります。

2. 同窓会、同期会など 会場費は同窓会でもつことになっていますので、理学部の同窓会へご連絡ください。75帖、10帖、8帖の日本間があり、10帖と8帖は1部屋にすることが出来ます。手続きや料理などについては、ご連絡下さった時説明します。

3. 宿泊 空室があれば格安で宿泊出来ます。先の会報で当日申し込み可能と書きましたが、現在大学の許可に3~4日の日数が必要となっています。混んでいますから早めに理学部の先生か同窓会にご連絡下さい。空室満室の問い合わせは勤務時間中であればすぐ出来ます。予約しておけば朝食(450円)はとれます。

理学同窓会会計報告

昭和60年度

収	入	支	出
前年度繰越	5,453,726	通信費	287,340
会費(168名分)	840,000	文房具等	41,450
名簿	22,000	印刷費等	394,800
利子	179,805	朋友会館運営基金	500,000
		雑費(謝金)	44,000
収入計	6,495,531	支出計	1,267,590

昭和61年度

収	入	支	出
前年度繰越	5,227,941	通信費	27,150
会費(187名分)	935,000	文房具等	7,325
名簿	2,000	印刷費等	40,300
利子	258,996	雑費(玄関前整備)	100,000
収入計	6,423,937	支出計	174,775

昭和62年度

収	入	支	出
前年度繰越	6,249,162	通信費	15,800
会費(184名分)	920,000	文房具等	9,280
名簿	2,000	印刷費等	4,300
利子	163,465	雑費(役員会費)	16,340
収入計	7,334,627	支出計	45,720

次年度繰越 7,288,907

あとがき

昭和で卒業された同窓会の皆さんお変わりございませんか。理学部が出来て20年経ち、今年文理学部が発足して40年になります。延び延びになっていた会報、今回発足した愛媛大学同窓会連合会結婚相談所のいろいろな案内と一緒に送ります。結婚相談の案内はPRもかねて、既婚未婚は区別しませんでした。

次の会報を愛媛大学創立40周年記念号として今年秋発行したいと思いますので、随想、大学時代の思い出や写真など多数お送り下さい。原稿の締め切りは7月末。写真は会報発行後お返しします。

また昨年8月発行しました愛媛大学文理学部および理学部同窓会会員名簿、まだ若干の残部があります。送料込み2,000円を郵便為替(徳島2-19981 愛媛大学理学同窓会)などでご送金下さればお送りします。会員以外には配布しません。次の名簿発行は4年後になりますが、住所や勤務先などの変更の際は都度ご連絡下さい。

今年の東京支部総会が5~6月に開かれる予定です。宛名書きは本部で行いますから連絡先の変更は本部宛お送り下さい。

表紙は今回も丸木由美子さん(S60生物卒)のお世話になりました。(越智)

平成元年2月22日 印刷発行

愛媛大学理学同窓会

〒790 松山市文京町2-5
TEL (0899) 24-7111
内2582・3516